

誰も知らぬ

太宰治

青空文庫

誰も知ってはいないのですが、——と四十一歳の安井夫人は少し笑って物語る。——可^お笑^かしなことがございました。私が二十三歳の春のことでありますから、もう、かれこれ二十年も昔の話でございます。大震災のちよつと前のことでございます。あの頃も、今も牛込のこの辺は、あまり変つて居りませぬ。おもて通りが少し広くなつて、私の家の庭も半分ほど削り取られて道路にされてしまいました。池があつたのですが、それも潰されてしまつて、變つたと言へば、まあそれくらいのもので、今でも、やはり二階の縁側からは、真^{まっすぐ}直^ちに富士が見えますし、兵隊さんの喇叭^{らっぱ}も朝夕聞えてまいります。父が長崎の県知事をしていたときに、招かれて、こちらの区長に就任したのでございますが、それは、ちよつと私が十二の夏のことで、母も、その頃は存命中でありました。父は、東京の、この牛込の生れで、祖父は陸中盛岡の人であります。祖父は、若いときに一人でふらりと東京に出て来て半分政治家、半分商人のような何だか危かしいことをやって、まあ、紳商とでもいうのでしょうか、それでも、どうやら成功して、中年で牛込のこの屋敷を買い入れ、落ちつくことが出来たようです。嘘か、ほんとか、わかりませんが、ずっと以前、東京駅で御災厄にお遭いなされた原敬とは同郷で、しかも祖父のほうに年輩からいっても、ま

た政治の経歴からいっても、はるかに先輩だったので、祖父は何かと原敬に指図さしずをするこ
とができて、原敬のほうでも、毎年お正月には、大臣になられてからでさえ、牛込のこ
家に年始の挨拶に立ち寄られたものだそうですが、これは、あまりあてになりません。な
ぜって、祖父が私に、そう言つて教えたのは、私が、十二の時、父母と一緒に始めて東
京の、この家に帰り、祖父は、それまで一人牛込に残つて暮していたのですが、もう、八
十すぎの汚いおじいさんになつていて、私はまた、それまでお役人の父が浦和、神戸、和
歌山、長崎と任地を転々と渡り歩いているのについて歩いて、生れたところも浦和の官舎
ですし、東京の家へ遊びに来たことも、ほんの数えるほどしかありませんでしたから、祖
父には馴染なじみが薄くて、十二のとき、この家にはじめて落ちつき、祖父と一緒に暮すようにな
つてからも、なんだか他人のような気がして、きたならしく、それに祖父の言葉には、
とても強い東北訛なまりが在りましたので何をおっしゃっているのか、よくわからず、いよいよ
親しみが減殺げんころされてしまうのでした。私が祖父に、ちつともなつかないので、祖父は手を
換え品を変え私の機嫌をとつたもので、れい原敬の話も、夏の夜お庭の涼み台に大あぐ
らをかいて坐つて、こんな工合ひしに肘を張つて、団扇うちわを使いながら私に聞かせて下さつたの
ですが、私は、すぐに退屈して、わざと大袈裟おごそかにあくびをしたら、祖父は、ちらとそれを

横目で見て、急に語調を変えて、原敬は面白くなし、よし、それでは牛込七不思議、昔な、などと声をひそめて語り出すのでした。なんだか、ずるい感じのおじいさんでした。原敬の話だって、あてにならないと思います。あとで父にそのことを聞いたら、父は、ほろりがく笑って、いちどくらいは、この家へ来たかも知れませんが、おじいさんは嘘を言いません、と優しく教えて私の頭を撫でて下さいました。祖父は、私が十六のときになくなりました。好きでないおじいさんだったので、でも、私はお葬式の日には、ずいぶん泣きました。お葬式があんまり華麗すぎたので、それで、興奮して泣いちやったのかも知れません。お葬式の翌^{あく}日、学校へ出たら、先生がたも、みんな私にお悔^{くや}みを言っして下さい、私はその都度、泣きました。お友達からも、意外のほどに同情され、私はおどおどしてしまいました。市ヶ谷の女学校に徒歩で通^{かよ}っていたのですが、あのころは、私は小さい女王のように、ぶん^{ぶん}に過ぎるほどに仕合せでございました。父が四十で浦和の学務部長をしていたときに私が生れて、あとにも先にも、子供といえれば私ひとりだったので、父にも母にも、また周囲の者たちにも、ずいぶん大事にされました。自分では、気の弱い淋^{びん}がりの不憫の子のつもりでいたのですが、いま考えてみると、やはり、わがままの高慢な子であったようにございます。市ヶ谷の女学校へはいつてすぐ、芹^{せりかわ}川さんというお友達が出来

ましたけれど、その当時はそれでも、芹川さんに優しく叮嚀^{ていねい}につき合っているつもりでいたのですが、これも、いま考えてみると、やっぱり私は、ひどく思いあがって、めんどろくさいけれど親切にしてあげるといふような態度も、はたから見ると在ったかも知れませんが。芹川さんもまた、ずいぶん素直に、私の言うこと全部を支持して下さるので、勢い主人と家来みたいな形になってしまふのでした。芹川さんのお家は、私の家の、すぐ向いで、ご存じでしょうか、華月堂というお菓子屋がございましたでしょう、ええ、いまでも昔のまま繁昌して居ります、いざよい最中^{もなか}といつて、栗のはいつた館^{あん}の最中を、昔から自慢にいたして売って居ります。いまはもう、代^{だい}がかわって芹川さんのお兄さんが、当主となって朝から晩まで一生懸命に働いて居ります。おかみさんも、仲々の働き者らしく、いつも帳場に坐つて電話の注文を伺^{うかが}つては、てきぱき小僧さんたちに用事を言いつけて居ります。私とお友達だった芹川さんは、女学校を出て三年目に、もういい人を見つけてお嫁に行つてしまいました。いまは何でも朝鮮の京城とやらに居られるようでございます。もう、二十年ちかくも逢いません。旦那さまは、三田の義塾を出た綺麗^{きれい}なおかたでして、いま朝鮮の京城で、なんとかいふ可成り大きな新聞社を経営して居られるとかいふ話でございます。芹川さんと私とは、女学校を出てからも、交際をつづけて居りましたが、交際

といつても、私のほうから芹川さんのお家へ遊びに行ったことは一度も無く、いつも芹川さんのほうから私を訪ねて来て、話題は、たいいてい小説のことでございました。芹川さんは、学校に居た頃から漱石そうせきや蘆花ろかのものを愛読していて、作文なども仲間々大人びてお上手でしたが、私は、その方面は、さっぱりだめでした。ちつとも興味を持ってなかつたのです。それでも、学校を出てからは、芹川さんのちよいちよい持って来て下さる小説本を、退屈まぎれに借りて読んでいるうちに、少しは小説の面白さも、わかつて来たようでした。けれども、私の面白いと思つた本は、芹川さんは余り、いいとおっしゃらず、芹川さんのいいとおっしゃる本は、私には、意味がよくわかりませんでした。私はおうがい 鴟外おうえいの歴史小説が好きでしたけれど、芹川さんは、私を古くさいと言つて笑つて、鴟外よりは有島武郎のほうが、ずっと深刻だと私に教えて、そのおかたの本を、二三冊持つて来て下さいましたけれど、私が読んでも、ちつともわかりませんでした。いま讀むと、またちがつた感じを受けるかも知れませんが、どうもあの有島とかたのは、どうでもいような、議論ばかり多くて、私には面白くございませんでした。私は、きつと俗人なのでございましょう。そのころの新進作家には、武者小路とか、志賀とか、それから谷崎潤一郎、菊池寛、芥川とか、たくさんございましたが、私は、その中では志賀直哉と菊池寛

の短篇小説が好きで、そのことでもまた芹川さんに、思想が貧弱だとか何とか言われて笑われましてけれど、私には余り理窟の多い作品は、だめでございました。芹川さんは、おいでになる度毎に何か新刊の雑誌やら、小説集やらを持って来られて、いろいろと私に小説の筋書や、また作家たちの噂話を聞かせて下さるのですが、どうも余り熱中しているの
で、可笑しいおかしと思つて居りましたところが、或る日とうとう芹川さんは、その熱中の原因らしいものを私に発見されてしまいました。女の友達というものは、ちよつとでも親しくなると、すぐにアルバムを見せ合うものでございますが、いつか、芹川さんは大きな写真帖を持って来て、私に見せて下さいましたけれど、私は芹川さんの、うるさいほど叮嚀な説明を、いい加減に合槌打つて拝聴しながら一枚一枚見ていつて、そのうちに、とても綺麗な学生さんが、薔薇ばらの花園の背景の前に、本を持って立っている写真がありましたので、私はおや綺麗なおかたねえ、と思わず言つてしまつて、なぜだか顔が熱くなりました。すると芹川さんは、いきなり、いやつと言つて私からアルバムをひたたくつてしまったので、私には、すぐははあと、気がつきました。いいの、もう拝見してしまつたから、と私が落ちついて言うと、芹川さんは急に嬉しそうに、にこにこ笑い出して、わかつたの？ 油断ならぬわね、ほんとう？ 見て、すぐわかつたの？ もうね、女学校時代からなのよ、

ご存じだったのね、などとひとり口早に言い始めて、私が何も知ってやしないのに、洗いざらい、みんな話して下さいました。ほんとうに、素直な、罪の無いおかたでした。その写真の綺麗な学生さんは芹川さんと、何とかいう投書雑誌の愛読者通信欄でも申しましようか、そんなところがあるでしょうか？ その通信欄で言葉を交し、謂わば、まあ共鳴し合ったというのでしょうか、俗人の私にはわかりませんが、そんなことから、次第に直接に文通するようになり、女学校を卒業してからは、急速に芹川さんの気持もすすんで、何だか、ふたりで、きめてしまったのだそうです。先方は、横浜の船会社の御次男だとか、慶応の秀才で、末は立派な作家になるでしようとか、いろいろ芹川さんから教えていただきましたけれど、私には、ひどく恐い事みたいで、また、きたならしいような気さえ致しました。一方、芹川さんをねたましくて、胸が濁ってときめき致しましたが、努めて顔にあらわさず、いいお話ね、芹川さんすっかりおやりなさい、と申しましたら、芹川さんは敏感にむつとふくれて、あなたは意地悪ね、胸に短剣を秘めていらつしやる、いつもあなたは、あたしを冷く軽蔑していらつしやる、ダイヤナね、あなたは、といつになく強く私を攻めますので私も、ごめんなさい、軽蔑なんかしてやしないわ、冷く見えるのは私の損な性分ね、いつでも人から誤解されるの、私ほんとうは、あなたたちの事な

んだか恐しいの、相手のおかたが、あんまり綺麗すぎるわ、あなたを、うらやんでいるのかも知れないのね、と思っっていることをそのまま申し述べましたら、芹川さんも晴れ晴れと御機嫌を直して、そこなのよ、あたし、家の兄さんにだけは、このことを打ち明けてあげるのだけれど、兄さんも、やっぱりあなたと同じようなことを言っつて、絶対反対なの、もつと地^じみちな、あたりまえの結婚をしろつて言うのよ、もつとも兄さんは徹底した現実家だから、そう言うのも無理はないけれど、でも、あたし兄さんの反対なんか気にしていないの、来年の春、あの人が学校を卒業したら、あたしたちだけでちゃんときめてしまうの、と可愛く両肩を張つて意気込んでいました。私は無理に微笑み、ただ首肯^{うなず}いて聞いていました。あの人の無邪気さが、とても美しく、うらやましく思われ、私の古くさい俗な氣質が、たまらなく醜いものに思われました。そんな打ち明け話があつてから、芹川さんと私との間は、以前ほど、じっくり行かなくなつて、女の子つて変なものです、誰か間に男の人がひとりはいると、それまでどんなに親しくつき合つていたつても、颯^さつと態度が鹿爪らしくなつて、まるで、よそよそしくなつてしまうものです。まさか私たちの間は、そんなにひどく変つたわけではございませんけれど、でも、お互に遠慮が出て、御挨拶まで叮嚀^{ていれい}になり、口数も少なくなりましたし、よろずに大人びてまいりました。どちらからも、

あの写真の一件に就いて話するのを避けるようになりまして、そのうちに年も暮れ、私も芹川さんも、二十三歳の春を迎えて、ちょうど、そのとしの三月末のことでございます。

夜の十時頃、私が母と二人でお部屋にいて、一緒に父のセルを縫って居りましたら、女中がそつと障子をあげ、私を手招ぎ致します。あたし？ と眼で尋ねると、女中は真剣そうに小さく二三度うなずきます。なんだい？ と母が眼鏡を額のほうへ押し上げて女中に訊ねましたら、女中は、軽く咳せきをして、あの、芹川さまのお兄様が、お嬢さんに鳥渡ちよつと、と言いにくそうに言つて、また二つ三つ咳をいたしました。私は、すぐ立つて廊下に出ました。もう、わかつてしまったような気がしていたのです。芹川さんが、何か問題を起したのにちがいない、きつとそうだ、ときめてしまつて、応接間に行こうとすると、女中は、いいえお勝手のほうでございます、と低い声言つて、いかにも一大事で緊張している者のように、少し腰を落して小走りにすつすつと先に立つて急ぎます。ほの暗い勝手口に芹川さんの兄さんが、にこにこ笑いながら立つていました。芹川さんの兄さんとは、女学校に通つていたときには、毎朝毎夕挨拶を交して、兄さんは、いつでも、お店で、小僧さんたちと一緒に、くるくると小まめに立ち働いていました。女学校を出てからも、兄さんは、一週間にいちどくらいは、何かと注文のお菓子をどどけに、私の家へまいていまして、

私も気易く兄さん、兄さんとお呼びしていました。でも、こんなに遅く私の家にまいりましたことは一度も無いのですし、それに、わざわざ私を、こつそり呼ぶというのは、いよいよ芹川さんのれいの問題が爆発したのにちがいない、とわくわくしてしまっ、私のほうから、

「芹川さんは、このごろお見えになりませんか。」と何も聞かれぬさきに口走ってしまいました。

「お嬢さん、ご存じだったの？」と兄さんは一瞬げんな顔をなさいました。

「いいえ。」

「そうですか。あいつ、いなくなつたんです。ばかだなあ、文学なんて、ろくな事がない。お嬢さんも、まえから話だけにご存じなんでしょう？」

「ええ、それは、」声のどが喉にひつからまって困りました。「存じて居ります。」

「逃げて行きました。でも、たいていいどころがわかつているんです。お嬢さんには、あいつ、このごろ、何も言わなかつたんですね？」

「ええ、このごろは私にも、とてもよそよそしくしていました。まあ、どうしたのですしょう。おあがりになりませんか？ いろいろお伺いしたいのですけれど。」

「は、ありがとう。そうしても居られないのです。これから、すぐあいつを捜しに行かなければなりません。」見ると、兄さんは、ちゃんと背広を着て、トランクを携帯して居ります。

「心あたりがございますの？」

「ええ、わかつて居ります。あいつら二人をぶん殴つて、それで一緒にさせるのですね。」兄さんはそう言つて屈託なく笑つて帰りましたけれど、私は勝手口に立つたままぼんやり見送り、それからお部屋へ引返して、母の物問いたげな顔にも気づかぬふりして、静かに坐り、縫いかけの袖を二針三針すすめました。また、そつと立つて、廊下へ出て小走りに走り、勝手口に出て下駄をつっかけ、それから、なりもふりもかまわず走りました。どういう気持であつたのでしょうか。私は未だにわかりません。あの兄さんに追いついて、死ぬまで離れまい、と覚悟していたのでした。芹川さんの事件なぞでんで問題でなかつたのです、ただ、兄さんに、もいちど逢いたい、どんなことでもする、兄さんと二人なら、どこへでも行く、私をこのまま連れていつて逃げて下さい、私をめちやめちやにして下さいと私ひとりの思いだけが、その夜ばかり、唐突に燃え上つて、私は、暗い小路小路を、犬のように黙つて走つて、ときどき躓つまずいてはよろけ、前を掻かき合せてはまた無言で走りつ

づけ涙が湧いて出て、いま思うと、なんだか地獄の底のような気持ちでございます。市ヶ谷見附の市電の停留場にたどりついたときは、ほとんど呼吸ができないくらいに、からだが苦しく眼の先がもやもや暗くて、きつとあれは気を失う一步手前の状態だったのでございましょう。停留場には人影ひとつ無かったです。たつたいま、電車が通過した跡の様子でございました。私は最後の一つの念願として、兄さあん！ とできるだけの声を絞って呼んでみました。しんとしています。私は胸に両袖を合せて帰りました。途々、身なりを整えてお家へ戻り、静かにお部屋の障子をあげたら、母は、何かあったのかい？ といぶかしそうに私の顔を見るので、ええ、芹川さんがいなくなっただけですって、たいへんねえ、とさりげなく答えて、また縫いものをはじめました。母は、何か私につづけて聞いたいふうでしたが、思いかえした様子で、黙って縫いものをつづけました。それだけの話でございませう。芹川さんは、まえにも申し上げましたが、その三田のおかたと芽出度く結婚なされて、いまは朝鮮のほうにいらつしやる様子でございませう。私もその翌年に、いまの主人を迎えました。芹川さんの兄さんとは、そのちお逢いしても、別になんともございませぬ。いまは華月堂の当主でして、綺麗な小さいおかみさんをおもらいになって仲々繁昌して居ります。やっぱり、ずつとつづけて一週間にいちどくらいは、御主人が注文の御

菓子をとどけにまいります。別に、かわったこともございません。私は、あの夜、縫いものをしてながら、うとうと眠って夢を見たのでございましょうか。夢にしては、いやにはつきりしているようでもございませぬ。あなたには、おわかりでしょうか。まるで嘘みたいなお話でございませぬ。でも、之は秘密にして置いていただきませぬ。娘があなた、もう女学校三年になるのでございませぬ。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年12月20日公開

2005年10月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

誰も知らぬ

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>